

歎異抄における身の概念についての一考察

西 田 真 因

第一 緒言

本考察の目的は歎異抄後序の「自身ハコレ現ニ罪惡生死ノ凡夫駄劫ヨリコノカタツ子ニシツミツ子ニ流転シテ出離ノ縁アルコトナキ身」の「身」の概念を明らかにすることである。この機の深信の言葉が善導、法然、親鸞と伝承され、歎

異抄に来て重大な転換をする。善導大師は「一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫駄劫已來常没常流転無有出離之縁^①」と記されている。これが法然では「決定シテフカク自身ハコレ罪惡生死ノ凡夫ナリ、駄劫ヨリ已來ツネニ流転シテ出離ノ縁アルコトナシト信ジ」(『三部経大意』)、「一には決定して、わが身は、これ煩惱を具せる罪惡生死の凡夫也、善根うすくすくなくして駄劫よりこのかた、つねに三界に流転して出離の縁なしと信ずべし」(『御消息』)、また聖覚法印では「ひとつには、わがみは罪惡生死の凡夫、駄劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず」(『唯

信鈔』)、また親鸞では「一つには決定して深く自身は現に是罪惡生死の凡夫駄劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなしと信ず」(坂東本『教行信証』の親鸞加点的延書)、一つには決定して、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、駄劫よりこのかた、つねに没しつねに流転して、出離の縁あることなしと深信すべし」(『愚禿鈔』下)となっている。

ところが歎異抄では「善導ノ、自身ハコレ現ニ罪惡生死ノ凡夫駄劫ヨリコノカタツ子ニシツミツ子ニ流転シテ出離ノ縁アルコトナキ身トシレ」となっているのである。つまり語尾が善導、法然、聖覚、親鸞のように「——なしと信ず」とか「——なしと深信すべし」ではなく、「——ナキ身トシレ」となっている。「自身ハ——ナキ身」となって、この「身」という一語が加わっている。これは善導の機の深信の言葉から見れば不正確・逸脱と考えられるが、しかしわたくしはここに歎異抄の画期的な意味があると考ええる。この一語が信心史を画した^②。そこで私はこの「身」を取り上げてその信心の

歎異抄における身概念についての一考察(西 田)

範疇における意味を考察してみたいと思うのである。しかし精神に対する身体の復権とか理性に対する感性の回復といったヨーロッパ哲学の問題意識の上に立つて、それを問題にしようとしているのではない。歎異抄それ自体の意味場において、この「身」の概念を明らかにしようと思図している。歎異抄の意味場とは信心の意味場である。その信心の意味場においては、この「身」はどういう概念を持った言葉なのだろうか、それを探究したいと思う。

第二 ミとココロとワ

先ずこの「身」について語源的次元の考察を加えておきたい。漢字の「身」の字形は「女子が妊娠して腹が大きくなり、中に子のある形を表す象形字」である。もともと身は妊娠の娠の本字であり、妊娠は「妊身」と表すのが正しい。したがって単に肉体の意味に使うのは借用である。字音は「娠」から来ていて「シン」という。「自身ハ」というときは身はシンと読むが、「ナキ身」のときは身はミと読む。この「ミ」音は実は日本語であり、漢語・漢字の入って来ない以前から日本にあったいわゆる基礎日本語である。したがって身をミと読むのは訓読みなのである。そこで次に基礎日本語としてのミの意味を尋ねておかなければならない。清水秀晃氏によると、ミの母義は大きく二類に分けられ、甲類は漢字で言え

ば「真」に当たる意味を母義とし、乙類は漢字で言えば「実」に当たる意味を母義としていると言う。そして甲類のミ(真)は理想面の充実をモチーフとして、神・霊・精・淳・正の意味を意味し、乙類のミ(実)は現実面の充実をモチーフとして、實在・充実・果実・中身等の意味を意味すると言う。したがってミを甲類でとれば霊・魂・精神となり、乙類でとればミは実で「人体にあって内を充たす体肉」ということになり、肉体・からだということになる。

そうしてみると基礎日本語としてのミは精神と肉体との両方を意味していると言えよう。そこで漢字としての身は肉体を意味するだけであるが、これをミと訓読みしたとき、文脈によっては肉体を意味するか、精神(霊・魂、自分、自己)を意味するかの両方あるわけである。したがってそれを具体的にその文脈において読み取っていかなければならない。またその文脈によっては一義的には決定しがたい身もある。むしろ重複的・立体的な深い読みが要求される場合もある。

歎異抄の身(ミ)の用例は十五例あり、身(シン)と読む用例は六例ある。肉体・からだに当たる類義語は「身(ミ・シン)のほかには使われていない。次に肉体に対して心は「コムロ」(名詞として)が三十例あり、「コムロエル」は四例、「コムロサシ」は二例、また「コムロニクシ」、「コムロホソシ」という形容詞が二例である。漢字の「心」の用例は

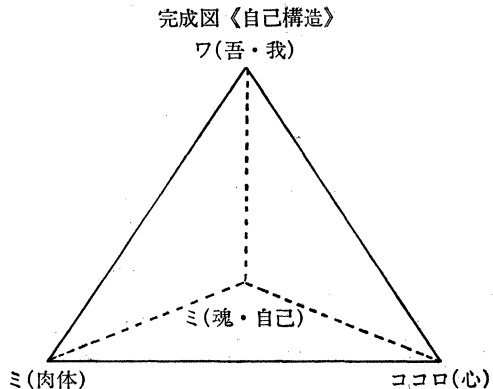
「信心」の「心」は三十二例、「廻心」の「心」は六例ある。基礎日本語コロは漢字の心に当てられるのであるが、同じ概念ではない。基礎日本語のコロは広い概念であって、知性・感情・意志の一切を含んだ概念である。したがって歎異抄ではその語の用いられている文脈によって、感情・意欲・意志・思い・自我心・判断・本意・徳などの意味になる。

次に「ワカコロ」、「ワレラカ身」、「ワカハカラヒ」の「ワ」である。ワは日本語文法の次元では一人称の代名詞である。しかし心理学・哲学的次元では自己意識と呼ばれるものである。心理学・哲学ではこの自己意識の明確化が自我の確立として考えられている。しかし歎異抄の信心の意味場では、ワが確立の方向ではなく、消滅の方向で問題となってきた。なぜワを肯定し強化する方向ではなく、否定し消滅の方向で問題となってきたのか。それは意識の病とその克服、つまり信仰主体の確立という問題があったからである。そのことを歎異抄の信心の深層構造を明らかにする形で分析して見たいと思う。

第三 《自己構造》

歎異抄における意識と心と精神と肉体との関係を仮に図解して考えて見ると次のようになる。第一図では「ワ（吾・我）」と「ミ（肉体）」と「コロ（心）」との正三角形を描く。ワ

歎異抄における身概念についての一考察（西田）



を頂点にして、ミ（肉体）を底辺の左に、コロ（心）を底辺の右にとる。この面をA面とする。ワ（吾・我）がミ（肉体）を「ワガミ」として意識し、コロ（心）を「ワガコロ」として意識する。逆に言えばワ（吾・我）にとってミ（肉体）はワに所有されているものであり、コロ（心）は同じくワによって所有されているものである。ワ（吾・我）は機能する意識であるが、単なる機能的意識ではなく理性的質を

もった機能的意識であり、精神的機能意識でもある。だからミ(肉体)やココロ(心)をわがものとして自由に支配し操作しようとする。ところがミ(肉体)やココロ(心)は決してワ(吾・我)の自由になるものではない。そこで、ワ(吾・我)とミ(肉体)、ワ(吾・我)とココロ(心)との矛盾、対立、葛藤が起こってくる。それが感情としては苦として感じられる。そこにその苦をどうして解決するかという問題が登場してくるわけである。そこから、なぜ苦が起きるのかという原因が探究されなければならない必然性が出て来る。

ところで、ワ(吾・我)にとってミ(肉体)とは第一次的には物理的存在であるが、それを基礎とした生物学的・生理学的な有機体である。たとえばその有機体それ自体の活動から起きてくる飢え・渇き、眠気、疲労、痛みといった感覚は、ワ(吾・我)の制御できないものである。またココロ(心)は恐れ、怒り、悲しみ、喜び、好き・嫌い、憎しみ・愛などで、これもまたワの意志通りに自由に制御できない。だからワ(吾・我)にとってミ(肉体)とココロ(心)はともにワ(吾・我)の意識としては自己に属するものでありながら、却って実存的には自己を超えている。その両者の関係構造のところに問題の根がある。

次に第二図として、ワ(吾・我)とミ(肉体)とミ(魂・自己)という正三角形の構造がある。ミはミ(肉体)とミ(魂・

自己)との二つの意味があると言った。ミ(自己・魂)は自己自身と言ってもいい。それはミ(肉体)のように物理的実在ではなく、ワ(吾・我)のように意識的実在でもない。それは主体性といった力学的中心のようなものである。バランスの中心のようなもので、空、あるいはゼロのようなものである。この正三角形の面をB面とする。

次に第三図で、ワ(吾・我)とココロ(心)とミ(自己・魂)という三項の正三角形の構造である。この正三角形の面をC面とする。次に第四図で、ミ(自己・魂)とミ(肉体)とココロ(心)という三項の正三角形の構造である。この正三角形の面をD面とする。このA・B・C・Dの四面が合わさって正四面体ができる。ワ(我・吾)とミ(肉体)とココロ(心)とミ(自己・魂)との四項は、このような関係構造になっている。これを《自己構造》と名付ける。

第四 第三信心の次元のワ(吾・我)

歎異抄の信心とは《弥陀ノ誓願不思議ニタスケラレマヒラセテ往生ヲハトクルナリ》と信じる信心である。この信心の意味場が開かれるとき、この《自己構造》はどうなるのであろうか。あるいは、四項、四面がどのような意味空間を開くのであろうか。それが歎異抄の問題である。

ワ(吾・我)は意識であり、自我意識である。このワが起

点となって、全てを対象化する。「ワガミ」とは、ワ（吾・我）を見る自分とするならミ（肉体）は見られる自分である。唯識的に言えば見分と相分である。これはココロ（心）との関係も見る自分と見られる自分となる。自証分と見分である。先程言ったように、見る自分と見られる自分との関係は心理的には矛盾、対立、葛藤が起こる。「ハカラヒ」が働く。これが第二自我の次元である。

第二自我の次元では、ワ（吾・我）は見られた自分としてのミ（肉体）——飢え・渇き・欲望といった生理・本能に近い部分やココロ（心）——恐れ、怒り、悲しみ、憎しみ・嫉妬といった煩惱の部分（吾・我）自身の力で抑圧したり排除したりして制御しようとする。そこでの原理は悪を廃し善を修する（^①）という廃悪修善の原理である。これは道德原理である。これが宗教となると穢を棄て浄を願う神道となる。仏教の中では親鸞の言う浄土門に対して聖道門である。そこでは見る自分が見られた自分を責め裁くという対立・葛藤はいつまでも続く。

第三信心の次元とは、「弥陀ノ智慧ヲタマハリテ、日コロノココロニテハ往生カナフヘカラストオモイテ、モトノココロヲヒキカヘテ、本願ヲタノミマイルスル」ところの「回心」を潜ることによって開かれた信仰意味空間である。

ワ（吾・我）はミ（肉体）——飢え・渇き、性欲、眠気、疲

歎異抄における身概念についての一考察（西田）

労、怠惰など肉体そのものから湧き起こってくる煩惱を惡として穢として責め裁く。その第二自我の次元では、ワ（吾・我）はミ（肉体）こそ惡・穢なるものであると思ひ込み、それを浄化しなければならぬと思ひ込んでいる。だから第二自我の次元でのワ（吾・我）は、「畋劫已来流轉の罪惡生死」の惡のものはミ（肉体）であると思ひ込んでいる。またココロ（心）であると思ひ込んでいる。ところが「弥陀ノ智慧ヲタマハル」ことによって、そのワ（吾・我）こそ惡なるもの穢なるものとして《教え》られる。その《教え》との出遇いによる懺悔を通して、ワ（吾・我）はミ（肉体）を自己として受容し、ココロ（心）を自己として受容する。そのときワ（吾・我）はミ（自己・魂）となる。つまりワ（吾・我）がミ（肉体）・ココロ（心）自身となるとき、ミ（自己・魂）としてのワ（吾・我）が誕生するのである。

第五 結語

「自身ハコレ現ニ罪惡生死ノ凡夫畋劫ヨリコノカタツ子ニシツミツ子ニ流轉シテ出離ノ縁アルコトナキ身」という「身」は、実はこの回心のワ（吾・我）としての「身」なのである。言い換えれば、信心のワ（吾・我）としての「身」である。それはワ（吾・我）、ミ（肉体）、ココロ（心）、ミ（自己・魂）の四項が一体となった「身」である。

歎異抄における身概念についての一考察(西田)

そのことを信心の意味場で言えば、「自身ハコレ現ニ罪惡生死ノ凡夫駄劫ヨリコノカタツ子ニシツミツ子ニ流転シテ出離ノ縁アルコトナキ身」の「身」は信仰告白のミ(自己・魂)である。しかも実在的に三世を生まれ変わり死に変わりして来たという事実を表白しているのではなく、そういう神話的表象を通して《罪》のものとしてのワ(自己・魂)の深さを告白し、その深い自己であるということを時間的なメタファで自己告白しているのである。それは「弥陀ノ智慧ヲタマハリテ」と言われるように、《教え》の光りに照らされて知らされた《わたくし》である。歎異抄では、その回心の信心の《わたくし》を「自身ハコレ現ニ罪惡生死ノ凡夫駄劫ヨリコノカタツ子ニシツミツ子ニ流転シテ出離ノ縁アルコトナキ身」という「身」として告白しているのである。

- 1 善導『観經四帖疏』散善・上品上生・深信釈・二種深信(『真宗聖教全書』一、三經七祖部、五三四頁。)
- 2 『法然・一遍』日本思想大系10、岩波書店。一九七一年。三二頁。
- 3 『法然・一遍』日本思想大系10。二一三頁。
- 4 金子大栄編『親鸞著作全集』法蔵館発行、六七〇頁。
- 5 『親鸞』日本思想大系11、岩波書店。一九七一年。三〇七頁。
- 6 金子大栄編、前掲書。三七八頁。
- 7 ただし隆寛律師作ではないかと考えられている「後世語聞書(後世物語聞書)」においても「ひとつには、ふかくみずから

がみは現にこれ罪惡生死の凡夫、煩惱具足して、善根薄少にして、つねに三界に流転して、駄劫よりこのかた出離の縁なき」と信知すべし」と言われている(金子大栄編、前掲書。一〇九五頁)。

- 8 山田勝美著『漢字の語源』(角川書店。昭和五十一(一九七六)年発行。一三六―一三七頁。
- 9 清水秀晃著『日本語語源辞典』、現代出版。昭和五十九(一九八四)年。三四〇―三四五頁。
- 10 清水秀晃著、前掲書。三四五頁。
- 11 歎異抄では「断惡修善」(第十五条)である。
*『自己構造』は紙面の都合上、完成図のみを掲載した。
△キーワード▽ 歎異抄、身、機の深信
(真宗大谷派教学研究会所刊)

新刊紹介

金岡秀友著

『大乘菩薩の世界』

A 5 版・七〇〇頁・一五〇〇〇円
佼正出版社・昭和六十三年七月二〇日刊